

研究論文

コロナ禍における学生の態度を規定する要因

—— 学生生活の実態と意識に焦点を当てた計量分析 ——

樋口友紀¹⁾・山本圭三²⁾

The Attitude to COVID-19 Pandemic and its Determinants in University Students

: Quantitative Analysis Focusing on Students' Daily Life and Mind

Yuki HIGUCHI, Keizo YAMAMOTO

オンライン形式が多用される新しい学修環境において、学生がどのように適応し、学修を成り立たせているのかといった実情を把握することは、教育機関における喫緊の課題である。このような課題に対し、筆者らはこれまで「学生の遠隔授業に対する適応度」と「コロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度」といった2視点による学生のパターン分類（態度類型）が、彼らのようすを把握するために有効であることを確認している（山本・樋口 2022）。一方で、このような類型の違いをもたらす要因や時期については明確な結論が得られていなかった。これを受け、本稿では最新のデータを用いて類型の違いをもたらす要因について検討することを主眼としている。

本稿の分析から、類型をもたらす要素として、属性や基本的な性格あるいは家庭環境といった要因の影響のあることが確認された。これらの結果は本人の努力に依らない事柄の影響が小さくない、ということを示すものであった。それゆえ、学生が提供される学修のスタイルについていけなくなった時、その学修の意欲の有無のみに問題を帰着させるのではなく別のアプローチが有効である可能性を示唆しており、それを講じることが重要であると本稿では結論づけている。

¹⁾ ²⁾ 摂南大学経営学部

はじめに

1.1 本研究のねらい

2019年から始まったコロナ禍は2022年もお収束の兆しが見えず、この間日本各地では複数回の緊急事態措置やまん延防止等重点措置が執られることとなった。これに対処すべく、多くの学校ではオンライン形式による授業が実施されてきたが、現在では対面形式・オンライン形式を併用する形でのハイブリッド型授業が実施されるケースも少なくない。ゆえに、学生は従来とは異なる状況下にて学修を行っているのが現実である。このように授業形態としてオンライン形式が多用される中、学生がどのように学修を成り立たせているのか、またどのようにしてそれに適応しているのかといったことについて、その実情を把握することは教育機関における喫緊の課題となっている。

筆者らはこうした課題について、これまで「学生の遠隔授業に対する適応度」と「コロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度」の2視点から学生を分類を行い、彼らの生活態度や意識を掘り下げることでそれぞれのパターンについて検討を行ってきた(山本・樋口 2022)。その結果、遠隔授業への適応度とコロナ禍生活の受容度によって作成される類型(これをコロナ禍に対する向き合い方の類型として、以降は「態度類型」と略記する)においてはそれぞれが独自の特徴を示していたことから、このような類型の違いを把握することが、将来的に学生に対して何らかの支援が必要となった際、その方法や有効性の確認に役立つであろうと結論付けている。

ただし、類型の違いをもたらす決定的な要因が何かという点については、これまでの検討の中では未だ明らかにできていない。このような「類型の差がどのような理由によりどの段階で生まれるものなのか」という点を確認する意義もまた大きいと考える。なぜなら、それも上述した支援の内容に深く関わると推測できるためである。それゆえ本稿では、類型間の違いを規定する要因について検討することを主たる目的としている。

2022年現在コロナ禍は依然として進行中であるが、他方で人びとはこの状況に少しずつ慣れてきていると思われる。学生たちもその点については同様であり、コロナ禍における学生生活の形やそれに対する意識についても、時間の経過とともに変化してきているように見受けられる。本稿ではこのような点も踏まえ、現状の学生たちの様子について最新のデータを用いて改めて確認し、彼らの今の様子を描き出すことを試みる。

1.2 本稿で行う検討

1.1でも述べた通り、本稿での主たる目的は、これまである程度特徴が把握されてきている態度類型が、どのような要因で形成されているのかを検討することにある。これに類する研究としては、次のようなものが挙げられる。

2020年以降、コロナ禍における授業実施やその効果、学生の受講のようすについての研究が多く行われてきた。実証分析を行うものに限ってもいろいろな研究がなされてきているようであるが、それらを大まかにまとめるならば大きく2つに分けて考えられるように思われる。1つには、主として遠隔授業の形態に注目し、そのパターンや効果について検討するものである(石崎・佐藤 2021、稲葉ほか 2022、田中・椿本 2021、田中・竹橋 2021、辻ほか 2022など)。そこで

は、オンライン授業の受講形態による学生の学習意欲には統計的な差が見られないこと（田中・椿本 2021）、しかしながら遠隔授業において教員の支援または阻害行動により、学生の well-being や意欲の高低には変化があること（田中・竹橋 2021）、そして教員のオンライン授業に対する授業効力感には、学生の受講態度が大きく影響すること（稲葉ほか 2022）、などが指摘されている。

もう 1 つは、主として学生の視点から、オンライン化での教育における心的状況を問題とするものである（阿江 2022、岩治 2021、川原 2022、中山 2022、米沢・中寺 2021 など）。中でも岩治（2021）ではコロナ禍における新しい大学生活への適応感、オンライン授業の負担感に対して、規則正しい生活や授業に集中できる環境、孤独感といった日常生活の様子が間接的に関わることも報告されている。

本稿でおこなわれる検討は、上の 2 つのうち後者の観点に近いものである。ただ、学生がコロナ禍において非対面で受講せざるを得ないといった状況において、そのスタイルに適応できるか否かが学生自身の生育環境や性格といった所与のものに起因する可能性もあると考えられる。この点にも着目しつつ、オンライン授業やコロナ禍に対する学生の態度の要因となり得るものを明らかにする点が本稿の特徴といえる。本稿での分析によって得られる知見は、学生個人に対して何らかの支援が必要となった際に、指針として資することが期待される。

1.3 使用するデータと類型の設定

分析には、筆者らが主体となって実施した「若年層の社会生活と諸意識についての調査」によって得られたデータを使用する。同調査は、2021 年 10 月～11 月に、関西・山陽・山陰地方が所在地である 7 つの大学に在籍する学生を対象として Web 調査の形式で行われたものである。関係者が担当する授業内で回答の協力を依頼するかたちで実施されており、有効回答数は 275 である¹。

分析の中心となる「遠隔適応度」と「コロナ禍生活受容度」については山本・樋口（2022）と同じく、「遠隔適応度」を表す質問項目として「授業が遠隔で行われることに不満はない」「オンライン授業でも集中できる」の 2 つを、そして「コロナ禍生活受容度」を表す質問項目として「以前の大学生活に早く戻りたい」を、それぞれ用いる。

¹ 回答者の内訳は次の通り。性別：男性 137・女性 138、年齢：20 歳未満 132・20 歳 75・21 歳 44・22 歳以上 23（不明 1）、大学所在地：関西地方 218・中国地方 57。その他調査の詳細に関しては山本・樋口・西岡編（2022）を参照のこと。

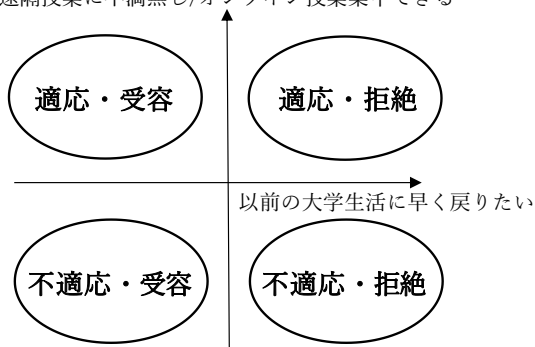
表1 類型に使用する変数の分布

	授業が遠隔で行われ ることに不満はない		オンライン授業でも 集中できる		以前の大学生活に早 く戻りたい	
	度数	有効%	度数	有効%	度数	有効%
当てはまる	107	38.9	39	14.2	36	13.1
やや当てはまる	78	28.4	76	27.7	45	16.4
どちらとも言えない	39	14.2	51	18.6	114	41.6
あまり当てはまらない	32	11.6	76	27.7	36	13.1
当てはまらない	19	6.9	32	11.7	43	15.7
合計	275	100.0	274	100.0	274	100.0

態度類型の作成方法についても、既存の知見を活かす意味で山本・樋口（2022）と同様の方法で行う。具体的には次のとおりである。

「授業が遠隔で行われることに不満はない」「オンライン授業でも集中できる」について、当てはまるほど数値が高くなるよう値を調整したうえで主成分分析を行い、主成分得点を算出する。この主成分得点の値をもとに0を基準に全体を2つに分け、0未満を「遠隔不適応」、0以上を「遠隔適応」とする2値の変数を作成する。さらに「以前の大学生活に早く戻りたい」を用いて、「当てはまる」「やや当てはまる」を1つに、それ以外の3つを1つにまとめた2値の変数を作成し、前者を「コロナ禍生活拒絶」、後者を「コロナ禍生活受容」とする。そのうえで、作成された2つの2値変数の組み合わせから類型を設定する。

遠隔授業に不満無し/オンライン授業集中できる



	度数	有効%
適応・拒絶	32	11.7
適応・受容	130	47.6
不適応・拒絶	48	17.6
不適応・受容	63	23.1
合計	273	100.0

図1 態度類型と分布

山本・樋口（2022）で用いた類型の割合と比較すると、概ね似たような傾向があるとみられるが、「適応・受容」については以前よりもその割合が多くなっているようである。これは、長引くコロナ禍における新しい学生生活のスタイル、そしてオンライン授業に学生たちが馴染みつつあることを示していると思われる。

2 態度類型の特徴

2.1 類型の確からしさの把握

具体的な検討を始める前に、山本・樋口（2022）における態度類型の各パターンの人びとそれぞれが持っていた傾向や特徴と、本稿で使用するデータにおけるそれが大きく違っていないか、という点について確認しておきたい。山本・樋口（2022）で使用したデータは2020年度の学生調査データであるが、本稿では2021年度に新たに実施された学生調査のデータを使用する。このため、以降で山本・樋口（2022）との結果について比較を行う際は、それぞれを「2020データ」「2021データ」と呼称して区別する。

ここでは、日常生活や他者関係、コロナウイルス関連意識などから「友人は多い方だ」「大勢で盛り上がるイベントが好きだ」「大学の成績はいいほうだ」「趣味の数（合計値）」「自分から周りの人に感染するのは嫌だ」「コロナ禍による『新しい生活様式』が割と気に入っている」の6項目を取り上げ、山本・樋口（2022）における同質問の結果との比較を交えて考察を行う。なお、質問項目はそれぞれ当てはまるかどうかを5段階で訊ねられている。これを当てはまると回答しているほど点数が高くなるよう値を調整した（5点満点）上で、分析に用いる²。「趣味数（合計値）」については、「読書」や「運動」など具体的に26項目を挙げ、うち実際に趣味として選択された数の合計を算出したものである。

表 2 態度類型ごとの特徴の確認（平均値の差）

	友人は多い方	大勢での イベント好き	大学の成績 良い	趣味数合計値	自分から周囲 感染が嫌	新しい生活 様式好き
適応・拒絶	3.219	3.313	3.438	5.906	4.469	2.969
適応・受容	2.754	2.846	3.346	5.162	4.675	3.630
不適応・拒絶	3.106	3.702	3.500	6.638	4.447	2.298
不適応・受容	2.730	2.698	3.032	4.774	4.500	3.419
主効果【適応度】	0.739	0.910	0.148	0.913	0.211	0.020
主効果【受容度】	0.012	0.000	0.052	0.001	0.241	0.000
交互作用	0.789	0.135	0.199	0.135	0.484	0.162
モデル	0.089	0.000	0.095	0.002	0.224	0.000

友人が多く大人数で集まることを好むなど、他者関係に前向きな姿勢を示すのは「適応・拒絶」と「不適応・拒絶」の人びとである³。この2項目については受容度の主効果が強く見られている。これは2020データから見られた傾向と同じである。対照的に、ソーシャルディスタンスの確保などを謳う『新しい生活様式』を好むのは、「適応・受容」「不適応・受容」の人びとである。特に「不適応・拒絶」の人びとの値が顕著に低くなっている点については、2020データにおいても同様であった。

大学での成績は、受容度の主効果がみられているが、これについては2020データと同様の傾向

² 以降の分析においても、5段階で回答を求めるものについては同様の調整を行っている。

³ 本稿における分析では、有意水準10%を目安に分析結果を判断している。以降も同様の基準を用いて分析結果について検討する。

となっている。コロナ禍生活を受容する方が、成績は低くなる印象だ。趣味の多さも2020データと同じく有意となった。やはり、「不適応・受容」の人びとの趣味の少なさが目立っている。なお、2020データにみられていた適応度の主効果が2021データでは見られなくなった点について言及すれば、長引くコロナ禍におけるリモートへの慣れから、それを前提として生活を楽しむ術をそれぞれに獲得した、という可能性が考えられる。

最後に、自分から周囲へのコロナウイルス感染を嫌うという項目では、2020データと同じく類型による有意差は見られなかった。類型にかかわらず、自分が誰かを感染させることを変わらず忌避しているようだ。これらの結果を俯瞰すると、2021データにおいても態度類型の特徴は大きく変化していないように思われる。それゆえ、本稿で検討しようとしている課題に関して、2021データを用いた分析をおこなうことに問題はないとみなせるだろう。

2.2 類型の新たな側面の把握

もう1点、2021データにおいて新たに把握される態度類型の側面についておさえておきたい。態度類型についてより多面的に特徴を把握しておくことは、多くの学生に接するにあたり重要であると考えられるからだ。そのため以下では、山本・樋口(2022)では検討されていなかった項目を取り上げて検討を行う。ただし、調査時点の違い(2020年時点か、2021年時点か)が結果に差異もたらしている可能性が考えられるものもあるため、以前検討しているものも一部含めて分析を行う。

最初に、日常の過ごし方について「規則正しい生活を心がけている」「特に用が無ければ外出したくない」「大学の講義や演習は自分のためになると思う」「授業内容を理解できないことがある」「人と話すことが好きだ」「いくら友人でも待ち合わせに遅刻するのは許せない」の6項目を挙げ

表3 態度類型ごとの学生生活のようすの特徴(平均値の差)

	規則正しい生活	用が無ければ外出したくない	大学の講義は自分のため	授業理解できない	人と話すことが好き	友人でも遅刻は許せない
適応・拒絶	3.438	3.469	4.469	3.063	4.188	2.281
適応・受容	2.654	3.992	3.962	3.140	3.715	2.367
不適応・拒絶	2.583	2.917	3.938	3.404	4.277	1.936
不適応・受容	2.683	3.524	3.452	3.429	3.661	2.565
主効果【適応度】	0.122	0.002	0.000	0.037	0.950	0.856
主効果【受容度】	0.056	0.001	0.000	0.750	0.001	0.027
交互作用	0.011	0.809	0.934	0.867	0.656	0.098
モデル	0.010	0.000	0.000	0.216	0.007	0.052

「規則正しい生活を心がけている」という項目では受容度の主効果が影響していることに加え、交互作用も見られている。その結果、「適応・拒絶」の人びとの値が最も高くなっている。2020データでは、「自粛が要請されていなくても、外出は控えた方が良いと思う」という、外出の意識を問う項目について確認していた。対して、2021データでは新たに「特に用が無ければ外出したく

ない」という内容で、より本音に近い回答を得ている。2020 データでは「適応・拒絶」の人びとの値が最も高くなっていて、表 3 では「適応・受容」の人びとが最も高い数値を示している。彼らは無駄な外出を好まないようだ。学修のようすについて言えば、「適応・拒絶」の人びとが最も積極的に講義を受講していることがわかる。この項目はいずれの主効果も大きいことから、不適応より適応が、受容より拒絶が、より強い傾向を示す。

授業についての理解度は、2020 データは有意であったのに対し 2021 データにおいてはモデル自体では有意な差が見られていない。その理由との一つとして、遠隔授業への慣れが挙げられるだろう。実際にモデルは有意ではないが、適応度の主効果は見られている。遠隔授業に適応し、その学修スタイルに慣れることができるかどうか、授業理解度を高める一つのカギになると言えそうだ。人と話すことを好むという項目では、受容度の主効果が大きいことから「不適応・拒絶」「適応・拒絶」の値が高く、彼らの他者関係における積極性が強く見て取れる。一方で、友人といえども遅刻を許せないと考えるのは「不適応・受容」「適応・受容」の人びとである。受容度の主効果が有意になっていることから、コロナ禍生活を受容するほどに他者に対する寛容性は低くなる、といった傾向がある。

表 3 では主に 4 類型の生活のようすについて確認したが、表 4 では価値のありように関する項目について分析結果をまとめている。分析に使用した項目は「何事も前向きに考える方だ」「給料が安くても楽な仕事がいい」「今、自分は幸せだ」「不用意に他人に近づく人は不快だ」「自分がコロナウイルスに感染することはそうそうないと思う」「コロナウイルスに対して恐怖心を感じる」の 6 項目である。

表 4 態度類型ごとの価値のありようについての特徴（平均値の差）

	何事も前向き に考える方だ	給料が安くても 楽な仕事がいい	今、自分は 幸せだ	他人に近づく 人が不快	コロナ感染 そうそうない	コロナに恐怖 心を感じる
適応・拒絶	3.656	2.375	3.563	3.281	2.813	3.563
適応・受容	3.016	2.386	3.835	3.378	2.992	3.465
不適応・拒絶	3.370	2.021	4.191	2.723	2.761	3.234
不適応・受容	3.082	2.721	3.525	3.226	3.016	3.274
主効果【適応度】	0.783	0.430	0.926	0.080	0.998	0.190
主効果【受容度】	0.009	0.025	0.180	0.077	0.223	0.887
交互作用	0.313	0.032	0.002	0.237	0.832	0.719
モデル	0.044	0.022	0.011	0.023	0.653	0.595

表 3 から、「適応・拒絶」の人びとの学修に対する積極性がうかがえたが、「何事も前向きに考える方だ」という項目に関しても同様の傾向が見られている。特に受容度の主効果が大きいことから、コロナ禍生活への拒絶は積極性から来るものと考えられる。これを反映するように、「不適応・拒絶」の人びとは労働に働き甲斐を求めていることがわかる。対照的に、「不適応・受容」の人びとは楽な仕事に就きたいと考えているようであり、交互作用も見られていることから、この両者の開きは顕著なものであるように思われる。

表 3 でも見られたように「適応・受容」の人びとはやや寛容性が低い傾向にあったが、彼らは

不用意に近づく人に対して不快感を示す傾向が強いように見える。一方で、「不適応・拒絶」の人びとは他人との距離感をさほど気にしていないことがわかる。幸福感を強く感じているのは「不適応・拒絶」「適応・受容」の人びとである。合理的で寛容性の低さも垣間見えた「適応・受容」の人びとであるが、彼らなりに人生を楽しく過ごしている姿がここからうかがえる。

「自分がコロナウイルスに感染することはそうそうないと思う」「コロナウイルスに対して恐怖心を感じる」の2項目に関しては、いずれも有意差がみられなかった。2020 データでは共に有意であったことを考えると（2020 データでは「自分がコロナウイルスに感染することはそうそうないと思う」「コロナウイルスに感染することは怖くない」という内容で質問）、やはり学生たちはこの1年間でコロナ禍生活に順応したと見てよいだろう。

3 類型の違いをもたらすもの

ここまで、類型それぞれの特徴が改めて把握された。これらを前提としつつ、メインの検討に向かおう。

山本・樋口（2022）における分析では、社会的背景要因や性格など基礎的な項目のうち一部が類型の違いに関係していることは分かっている。ここでは関連のあることがすでに確認されている要因も含め、まず要因として想定される変数と類型との2変数間関係を確認し、その後規定関係を検討する、という流れで分析を進めていく。

3.1 属性的要因

最初に、「年齢」「性別」「居住形態」「出身地」といった属性的要因と類型の関わりについて確認する。「居住形態」は「実家に住んでいる」「実家以外に住んでいる」、「出身地」は「大都市」「地方都市」「農村部」といった選択肢をそれぞれ設け、近いものを選択してもらった形式で訊ねた質問を用いる。

表 5 類型と社会的背景との関連（平均値の差）

	年齢
適応・拒絶	19.719
適応・受容	19.581
不適応・拒絶	20.188
不適応・受容	19.667
主効果【適応度】	0.213
主効果【受容度】	0.060
交互作用	0.281
モデル	0.050

表 6 類型と社会的背景との関連（クロス表）

		適応・拒絶	適応・受容	不適応・拒絶	不適応・受容	合計	<i>N</i>	<i>p</i>
性別	男性	13.1%	49.6%	14.6%	22.6%	100.0%	137	0.547
	女性	10.3%	45.6%	20.6%	23.5%	100.0%	136	
	合計	11.7%	47.6%	17.6%	23.1%	100.0%	273	
居住形態	実家	11.6%	52.3%	16.2%	19.9%	100.0%	216	0.010
	実家以外	12.5%	28.6%	23.2%	35.7%	100.0%	56	
	合計	11.8%	47.4%	17.6%	23.2%	100.0%	272	
出身地都市度合	大都市	7.2%	60.9%	15.9%	15.9%	100.0%	69	0.182
	地方都市	14.6%	43.3%	17.8%	24.2%	100.0%	157	
	農村部	8.5%	42.6%	19.1%	29.8%	100.0%	47	
	合計	11.7%	47.6%	17.6%	23.1%	100.0%	273	

表 5 より、「不適応・拒絶」の人びとの年齢層がその他の類型の人びとと比較して高いことがわかる。受容度の主効果も見られており、年齢層は拒絶であるほど高くなる傾向にあるようだ。コロナ禍以前の生活を経験した時間が長いほど、コロナ禍における大学生活を受け入れ難く感じているのかもしれない。性別や出身地と類型の間には関連があるとは言えないが、居住形態は有意となった。「適応・受容」の人びとは実家に居住している割合が高く、対して「不適応・受容」や「不適応・拒絶」の人びとの多くは実家以外に居住している。

3.2 家庭環境要因

次に、家庭環境と類型の関係について確認する。家庭環境からは「出身家庭は豊かな方である」「親は厳しかった」「中学時小遣い金額」の3項目を挙げる。なお、中学時小遣い金額は「1.1000円未満」「2.1000円～3000円未満」「3.3000円～5000円未満」「4.5000円～10000円未満」「5.10000円以上」「6.お小遣い制ではなかった」といった選択肢を設け、近いものを選んでもらう形式で訊ねたものを用いている。分析に際しては、金額が多いほど数値が大きくなるよう値を調整したものをを用いる⁴。

⁴ 「お小遣い制ではなかった」という選択肢について、分析時にはこの回答を「0」に変換している。

表 7 類型と家庭環境との関連（平均値の差）

	出身家庭豊か	親は 厳しかった	中学時小遣い 金額
適応・拒絶	3.563	3.406	1.750
適応・受容	3.884	3.331	1.508
不適応・拒絶	3.750	2.979	1.553
不適応・受容	3.790	3.143	1.817
主効果【適応度】	0.970	0.077	0.346
主効果【受容度】	0.224	0.766	0.935
交互作用	0.334	0.455	0.136
モデル	0.467	0.233	0.371

出身家庭の豊かさや中学時お小遣い金額はモデル自体が有意ではないようである（出身家庭の豊かさについては 2020 データと同様の結果である）。他方、親の厳しさについてはモデル全体では有意でないものの、適応度の主効果が影響力を持つようである。このことから、オンラインに適応できている者ほど家庭では厳しく育てられてきたと言えそうだ。

3.3 基本的性格要因

次に、回答者の基本的な性格について検討する。性格については、山本・樋口（2022）においても一定程度の関連があることは分かっている。ここで取り上げる性格は基本的な回答者の性格を問うものであるため、態度類型に影響しうる変数と考えることができる。そのため、改めて態度類型を決定する要因としてここで検討しておきたい。

今回用いるデータにおいて、基本的性格として訊ねられているものと態度類型との関連を確認したものが、次の表 8 である。表 8 では特に、人物を表現すると考えられる主なものとして「真面目」「我慢強い」「積極的」「面倒くさがり」「行動的」「人見知り」「要領が良い」の 7 項目を取り上げている。調査では、これらの項目について当てはまるものすべて選んでもらう多項選択肢で訊ねられている。それゆえ表 8 において「○あり」という行が当該性格が自分自身に「当てはまる」と回答した人たち、「○なし」という行が「当てはまらない」と回答した人たちをあらわしている。

表 8 類型と性格の関連（クロス表）

		適応・拒絶	適応・受容	不適応・拒絶	不適応・受容	合計	<i>N</i>	<i>p</i>
合計		11.9%	47.2%	17.8%	23.0%	100.0%	269	
真面目	○なし	11.3%	48.4%	16.1%	24.2%	100.0%	124	0.885
	○あり	12.4%	46.2%	19.3%	22.1%	100.0%	145	
我慢強い	○なし	9.0%	48.4%	17.0%	25.5%	100.0%	188	0.095
	○あり	18.5%	44.4%	19.8%	17.3%	100.0%	81	
積極的	○なし	11.8%	50.2%	15.4%	22.6%	100.0%	221	0.082
	○あり	12.5%	33.3%	29.2%	25.0%	100.0%	48	
面倒くさがり	○なし	21.3%	40.0%	18.8%	20.0%	100.0%	80	0.017
	○あり	7.9%	50.3%	17.5%	24.3%	100.0%	189	
行動的	○なし	11.3%	50.5%	15.1%	23.1%	100.0%	212	0.080
	○あり	14.0%	35.1%	28.1%	22.8%	100.0%	57	
人見知り	○なし	12.2%	43.9%	23.7%	20.1%	100.0%	139	0.061
	○あり	11.5%	50.8%	11.5%	26.2%	100.0%	130	
要領が良い	○なし	12.3%	45.3%	18.6%	23.7%	100.0%	236	0.431
	○あり	9.1%	60.6%	12.1%	18.2%	100.0%	33	

表 8 より、「我慢強い」「積極的」「面倒くさがり」「行動的」「人見知り」は類型と関連があると言える。中でも「面倒くさがり」については、2020 データと同様に有意となっている。表 8 の結果を俯瞰すると、類型はそれぞれ次のような特徴をもつと言えそうだ。

「適応・拒絶」は我慢強く面倒くさがりではないのに対し、「適応・受容」は面倒くさがりであり、積極的でも行動的でもなく人見知りの傾向がある。「不適応・拒絶」は行動的、積極的で人見知りもしない一方で、「不適応・受容」は我慢強くなく、その上人見知りであるとみられる。

3.4 規定関係の確認

ここまで、社会的背景要因や性格など基礎的な項目のうち、類型に関係するものを確認してきた。ここでロジスティック回帰分析により、それらの項目のうちどれが類型の規定要因となっているかという点について、明らかにしたい。次の表 9 は、基準カテゴリを「適応・受容」とした上で、各類型と基礎項目の関係について示したものである。

表 9 類型と基礎項目の関係

	適応・拒絶			不適応・拒絶			不適応・受容		
	B	Exp(B)	有意確率	B	Exp(B)	有意確率	B	Exp(B)	有意確率
切片	-2.294		0.508	-5.492		0.058	-0.720		0.798
年齢	-0.003	0.997	0.988	0.244	1.276	0.081	-0.049	0.953	0.724
性別	-0.317	0.729	0.469	0.158	1.171	0.671	0.277	1.319	0.418
居住形態（実家以外）	0.806	2.238	0.173	0.868	2.383	0.074	1.176	3.243	0.008
出身地（大都市）	-0.380	0.684	0.649	-0.014	0.986	0.983	-0.625	0.535	0.294
出身地（地方都市）	0.739	2.094	0.276	0.380	1.462	0.465	0.164	1.178	0.728
中学時小遣い金額	0.222	1.249	0.214	0.063	1.065	0.685	0.270	1.310	0.056
出身家庭豊か	0.336	1.399	0.090	0.134	1.144	0.449	0.096	1.101	0.545
親は厳しかった	-0.018	0.982	0.922	-0.294	0.745	0.059	-0.051	0.951	0.730
性格：我慢強い	0.753	2.124	0.096	0.245	1.278	0.553	-0.258	0.772	0.512
性格：積極的	0.307	1.360	0.648	0.365	1.441	0.517	0.564	1.758	0.304
性格：面倒くさがり	-1.225	0.294	0.006	-0.321	0.725	0.438	-0.193	0.824	0.627
性格：行動的	0.285	1.330	0.640	0.627	1.871	0.225	0.146	1.158	0.775
性格：人見知り	-0.169	0.844	0.707	-0.772	0.462	0.051	0.281	1.324	0.426
-2LL	589.193								
Cox & Snell's R2	0.216								
N	263								

基準カテゴリ：適応・受容

表からは、次のような傾向があると言えそうである。「適応・拒絶」には、「適応・受容」に比べ出身家庭が豊かであり、性格は我慢強く面倒くさがりでない者がなりやすい。また「不適応・拒絶」は、年齢層が高く、実家以外に居住している、幼少期にあまり親が厳しく接しておらず、性格は人見知りでない者がなりやすいようである。すなわちこのタイプは上級生で、一人暮らしをしている者に多く見られるといえるようである。「不適応・受容」は、「適応・受容」と比較すると、実家以外に居住しており中学時の小遣い金額が高い傾向にある。生活面でも金銭面でも自由度の高い生活を享受していた者ほど「不適応・受容」になっていく向きがあるのかもしれない。

以上より、個人がどの類型となるのかを規定する要因が一定程度明らかになったとみて差し支えないだろう。総じて出身家庭の環境や家族との関係、年齢や性格などの基礎項目は、4 類型を規定する要因とみなしてよいようである。

4 おわりに

本稿では、オンライン形式が多用される新しい学修環境において、学生がどのように学修を成り立たせ、それに適応しているかといったことの実情を把握すべく分析を行ってきた。山本・樋口（2022）では、「学生の遠隔授業に対する適応度」と「コロナ禍により大きく変化した学生生活への受容度」といった 2 つの側面から学生を分類することで、これについて検討したが、類型の違いをもたらす要因や時期については検討の余地を残していた。この点を踏まえ、本稿では新たなデータで同じ指標（態度類型）を用いつつ、態度類型の違いをもたらす要因を発見することを主眼とし

た。

分析を通して、まず態度類型が新たなデータでもある程度有効であること、その上で山本・樋口（2022）では確認できていなかった日常生活、学修態度、意識などの側面に着目することで、態度類型を用いた分類による学生の特徴をさらに深く掘り下げることができた。それらをふまえ、態度類型の各パターンにどのような項目が効いているかを検討した結果、属性や基本的な性格あるいは家庭環境といった、本人の努力により左右されるわけではない要因の影響が小さくない、ということが明らかとなった。

本稿で得られた結果は、次のようなことを意味する重要なものだと言える。コロナ禍にあったとしても、提供されるスタイルでの学修についていけない学生に対しては、時に「やる気がない」「勉強しようと思っていない」といった本人の意欲の有無に問題を帰着させる議論は少なくないと思われる。しかし、本稿の分析からは態度類型、すなわちコロナ禍においてどういった態度をとるのかということに、本人の責めに帰さない要因が大きく影響しているということが示された。つまり、コロナ禍での生活をうまく進められるかどうかは、すべてが本人の努力でどうにかなるものではなく、むしろ本人にはどうしようもない要因で決まってしまう場合も少なくないとみられるのである。それが正しいとすれば、ついていけない学生に対して「本人の意欲を高めるべく叱咤激励を行う」ことが必ずしも得策だとは言えない。そうではない、別のアプローチがむしろ必要であり、それを講じることが問題状況の解決を左右する、ということもできるのである。

このような意味から、本稿における分析をふまえ態度類型における各パターンの差異を把握することが、画一的な学生への支援や対応を回避し、ひいては学生とのより良い関係性の構築に資するものになると考えられる。ゆえに、学生と相対する際にはこれらの結果が効果的に用いられることを期待し、本稿の結びとする。

【付記】

本稿で用いているデータの収集にあたっては、摂南大学人を対象とする研究倫理審査委員会の審査を受けた（2020-035）。また、研究協力者や調査にご協力いただいた多くの学生の皆さまにこの場を借りて感謝申し上げます。

【文献】

阿江美恵子，2022「コロナ禍による大学オンライン授業と大学適応について—2020年度の大学入学生について—」『東京女子体育大学・東京女子体育短期大学紀要』57：67-79.

石崎龍二・佐藤繁美，2021「同期型・非同期型オンライン授業による多変量解析に関する統計演習の教育効果（2020年度）」『福岡県立大学人間社会学部紀要』30（1）：155-168.

稲葉利江子・高比良美詠子・田口真奈・辻靖彦，2022「コロナ禍のオンライン授業における大学教員の授業効力感に影響する要因の検討」『日本教育工学会論文誌』46（2）：241-253.

岩治まどか，2021「大学生活への適応と孤独感について—コロナ禍による大学生活の変化に着目して—」『東京家政大学付属臨床相談センター紀要』21：53-70.

- 川原正人, 2022「コロナ禍での新しい生活様式におけるポジティブな変化」『東京未来大学研究紀要』16: 135-139.
- 田中仁一郎・椿本弥生, 2021「学習意欲とオンライン授業受講形態の関連性」『日本教育工学会研究報告集』4: 132-139.
- 田中里奈・竹橋洋毅, 2021「遠隔授業における大学生の well-being と ill-being の規定因—教員の欲求支援行動と欲求阻害行動の影響に着目して—」『人間環境学研究』19 (2): 99-108.
- 辻靖彦・高比良美詠子・稲葉利江子・田口真奈, 2022「コロナ禍におけるオンライン授業の ICT 利用に基づく類型と学生の受講態度との関連」『日本教育工学会論文誌』46 (4): 653-666.
- 中山ちなみ, 2022「コロナ禍状況における大学生のストレスと「新しい生活様式」への態度—— 2020年 Web 調査データを用いた計量分析」『ノートルダム清心女子大学紀要 文化学編』46 (1): 97-109.
- 山本圭三・樋口友紀, 2022「変わりゆく学びのかたちに対する現代大学生の適応の諸相—新しい授業形態への適応とコロナ禍生活の受容に注目した計量分析—」『摂南大学教育学研究』18: 37-58.
- 山本圭三・樋口友紀・西岡暁廣編, 2022『2021年度「市場調査実習」成果報告書——「大学生の社会生活と職業意識」調査——』摂南大学経営学部.
- 米沢崇・中寺麻友, 2021「オンライン形式・双方向型授業での大学生のソーシャルスキルと授業適応感の関連」『日本教育工学会論文誌』45: 37-40.